

片マヒ者用の歯磨きコップを開発

神奈川県 原田太郎さん

開発のきっかけになった
看護師さんの一言

神奈川県愛甲郡に住む原田太郎さん（66歳）が脳内出血で倒れたのは、2003年3月のことでした。すぐに入院して手術を受け、リハビリ病院に転院して7カ月間リハビリに励みましたが、左半身にマヒが残り1級障害者となりました（現在、要支援2）。

倒れた頃の原田さんは、都内で居酒屋を経営し、ゲンさんの愛称で親しまれる人気者でした。54歳で早期退職して好きな飲食業を始め、第二の人生を謳歌していたのです。それが一転。半身にマヒがあると、歯ブラシに練り歯磨きを付けることさえ一人ではできません。リハビリ病院に入院中、原田さんはカーテンの陰で泣いたり、イライラして奥さんに当たったり、絶望の淵をさまいました。立ち直るきっかけは、病棟の看護師さんのひと言でした。

用のコップを作ってみれば？

口腔ケアが重視されるリハビリ病院では、1日3、4回歯を磨きますが、大半の人に介助が必要です。歯ブラシを挟めるコップがあれば、片手でも練り歯磨きを付けられるので、介助の手間が省けるうえ、自立の第一歩になるのではないかと。そう考えた原田さんは、早速開発に着手しました。

完成したのは3年半後。家族の支えはもちろん、神奈川県福祉評価モニター事業への参加をはじめ、病院や大学など産・学・官の協力を得られたのは、社交的な原田さんが、熱意を傾けて周囲を巻き込んだ成果でした。

これからも福祉用具を
作り続けたい

完成した片マヒ者用のコップは、パラリンコップと名付けられました。すでに意匠登録、商標登録、特許出願を終えています。その過程で原田さんは、福祉用具作りの仲間たちとNPO法人「たくみ21」を立ち

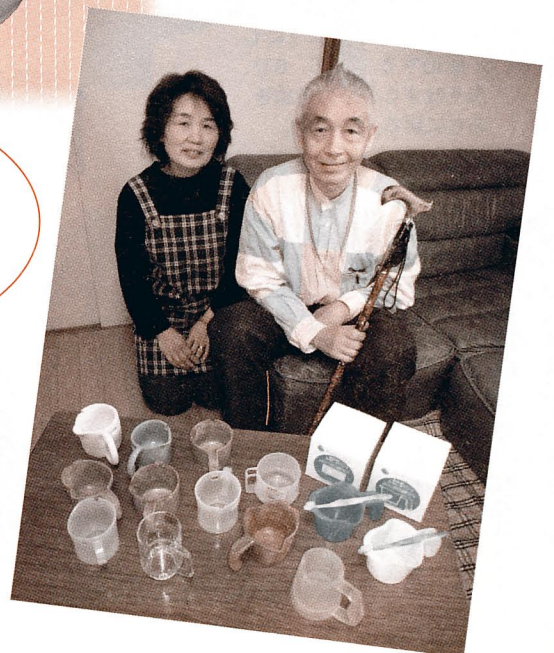


中央の溝に歯ブラシが固定できるので、片手で簡単に練り歯磨きを付けられる

コップの飲み口にカーブを付け、マヒしていない側に水が流れる工夫がなされているので、マヒ側の口元からの水こぼしや誤嚥によるむせ込みが少ない

●パラリンコップは乳白とエコグリーン2色。1個1890円（税込み・送料別）

➔完成品にたどり着くまで、原田さん夫婦はいくつも試作を繰り返した。テーブルの上に並ぶのは、試作品の数々



上げ、2006年の国際福祉機器展にブースを出しました。展示されたパラリンコップは、NHKのニュースでも取り上げられ、大きな反響を呼びました。

樹脂で大量生産できるよう、金型の製作に時間をかけたパラリンコップは、ようやく2007年3月から発売が開始されています。

原田さんの次の目標は、自分がりハビリ病院の看護師さんなどから集めた「欲しい福祉用具」のアンケートをもとに、介助する人と介助される人が共に喜ぶ福祉用具を作り続けることです。片マヒはあっても免許を書き換えて上手に車乗り回す原田さんは、新たな夢を追って、今日も元気に外を飛び回っています。